参考資料１

令和３年度第２回富山県公立大学法人評価委員会　議事録（概略版）

１　日時　令和３年８月４日（水）　13:30～15:30

２　場所　富山県立大学射水キャンパス　９階特別会議室

３　出席委員

・林　　幸秀　　〔(公財)ライフサイエンス振興財団理事長〕※委員長

・福田 敏男　　〔名城大学大学院理工学研究科教授、名古屋大学名誉教授〕

・藤重　佳代子〔(株)マーフィーシステムズ代表取締役社長〕

・堀　　仁志　　〔堀税理士法人代表社員・公認会計士〕

・山下 清胤　　〔(一社) 富山県機電工業会会長・三協立山㈱相談役〕

４　会議の概要

・司会が開会を宣し、経営管理部次長より開会の挨拶

・司会より、林委員長に議事の進行を依頼し、以後の進行については委員長が行った。

・委員長より、(評価の対象である) 法人が本日の委員会に最後まで同席することについて、委員の了承を得た。

議事１　令和２年度の業務実績に関する評価について

＜事務局説明＞

資料１に基づき、令和２年度の業務実績に関する評価（案）について説明

（委員長）

本案についてのご意見をお願いしたい。

（委員）

研究費が多くなるのはよいことだが、一方で教員側の負担も増える。サバティカル（長期休暇・研究休暇）の制度も含め、教員のサポート体制はどのように考えているのか。

（法人）

特任研究員や特任助教等を積極的に雇用している。また、サバティカルについても推進し、今年度は海外に１名、南極に１名がいる。さらに、裁量労働の導入についても検討している。

（委員長）

２ページ目に記載のある「ユマニチュード」とは何か。

（法人）

最近、医療や介護の現場でも注目されており、特に、コミュニケーションを取るのが難しい認知症の患者さんに、見るということ、そして語りかける、優しく触るという包括的なケアを実践することで脳に刺激を与え、コミュニケーションをより深く取れるようにする技術のこと。人間の自由や尊厳を守るということを念頭に置きながら的確な技術を提供してコミュニケーションを図っていく。体系的に看護学教育の中に取り入れているのは本学が日本で初めてである。

（委員）

コロナ禍において法人として学生に対してどのような対応をされたのか具体的に記載願いたい。

また、留学生に対する対応についても記載願いたい。

（事務局）

大学とも調整し、記載したい。

（法人）

海外から新たに来る留学生は、昨年の段階でほとんどストップしている。また、母国に帰っていて戻って来られなくなった留学生には、ウェブ等での対応を行っている。既に国内にいる留学生に関しては、今までどおり対応しており特に問題はない。

（委員）

６ページの業務運営の改善及び効率化に関する目標について、コロナの影響により、従来の目標より早く進んだとか、従来の目標と少し変えていかなければならないという事例はないか。

（法人）

学生に対しては国の財政支援や県による県産米の配布、大学での無償ルーター貸与などいろいろ実施しているが、委員ご指摘の法人運営や法人経営に関しての部分については、特筆すべき事例はない。

（委員長）

留学生もさることながら、例えば瀋陽化工大学の交流などは今リモートでやっていると思うが、なかなか新しい大学との交流を始めることまでには至らず、そういったことの影響が出てきているのではないかと思う。

（委員）

非常に簡潔にまとめられて、先日の意見交換の内容も反映されていてよいのではないかと思う。意見等は特にない。先ほど質問があったような項目が追加されればよいと思う。

（委員長）

それでは、今回意見の出た項目について追加修正を加える形で進めたい。また今後の手続きについては、評価の基本方針にあるように法人に対し、意見の申立ての機会を与えることになっている。これらについては事務局と協議して、委員長である私に一任とさせていただきたい。

（各委員）

異議なし。

議事２　中期目標期間の業務実績に関する評価について

＜法人説明＞

資料２－１、資料２－２などに基づき、中期目標期間の令和２年度の業務実績の概要、法人側の自己評価について説明。また、研究の質及び外部資金受入れについて、追加資料により説明。

＜事務局説明＞

参考資料２などに基づき、評価委員会の評価（案）を取りまとめるにあたっての手続き、評価の際の参考となる事項等について説明。

（委員長）

大学事務局からの説明について、各委員の意見、質問等を求めるとともに、参考資料２の各項目別評価案として仮にＡとなっているものについて、このままで可とするか、あるいは評価を上げるもの、下げるものはあるか、決定していきたい。

（委員）

過去６年間を見て、定員を２３０人から３４０人にするなど、すばらしいと思う。

確認だが、最初５学科だったものが今全部で７学科になったということだが、大学の博士後期課程についても７専攻にしているということか。

（法人）

修士に関しては、生物に医薬品を併せて生物・医薬品工学科１専攻にするなど、従来の専攻の枠は増やさず５専攻にしている。大学院の博士課程は、従来の５専攻を総合工学科の１専攻にまとめ、定員も２０名から１０名にしている。

（委員）

了解した。それから、工学部において優秀な女子学生を確保するための取組みもすばらしいと思う。近年はＤ＆Ｉ（ダイバーシティ・アンド・インク

ルージョン）という言葉も注目されており、このような言葉も取り入れてはよいのではと思う。また、教員にインセンティブを与える評価の仕組みづくりもよい取組みだと思う。

学位の認証機構については、平成２８年に評価を受けた後、どのようになっているのか。

（事務局）

これまで受けたのはこの１回だけで、概ね７年に一度評価を受けるもの。次回は３年後の予定である。

（委員長）

評価において、博士後期課程の定員充足率の低さ、危機管理全般に及ぶ規程マニュアルの不備の２点が要改善点として挙げられているが、現状はどうなっているか。

（法人）

大学院の博士後期課程の定員を１８から１０に減らし、修士課程は７８から１０８に増やした。博士後期課程をどうやって増やしていくかということは課題だと思っている。危機管理に関する規定は既に整備している。

（委員）

ＤＸの推進に向けて定員を拡充するとあるが、今後定員が増える予定などがあるのか。

また、学生の県内企業への就職率向上に向け取り組んでいるが、ＤＸに関連する工学科の人たちを増やすということになれば、県内の企業ではなく首都圏への就職が増えるのではないか。

県内の企業というのはどのような定義によって定めているのか。

（法人）

県内企業の定義については、従前は本社の所在地により判断していたが、

現在は勤務場所で判断している。

ＤＸ関係の定員については、来春、知能ロボット工学科と情報システム工学科で合計３５名の増となる。ＤＸ関係の人材が首都圏に流れるのではないかというおそれについては、現時点でもどの学科でもある話である。県内企業２３０社余りと本学との研究協力会という形により、県内就職率の増加に向けて取り組んでいる。昨年は４９．１％となっており、５０％を超えられるように努力していきたい。

（委員）

海外では、ドクター（博士）に対して敬意を払うという感覚があり、非常に高い評価を受けている。そういうことに学生にも気づいてもらえればと思う。

（委員）

６年間ここまでよくやってきたと思う。新しい学科、特に看護学部を設置し、魅力ある県立大学を世に発信してきている。これを担っている大学の先生方は大変な苦労があるとは思うが、今後富山県立大学の評価や認知度がさらに上がれば県立大学を目指す学生も増え、学生の質が上がるとともにドクターを目指す学生も来てもらえれば、好循環が生まれると思う。

（委員）

認知度を上げるということは、人が引き抜かれる可能性も高くなることを認識しなければいけない。

ドクターを取得することの効果については、50代くらいになると分かってくるが、若いうちは分からない。これは大学が説明するよりも、卒業生なり先輩が学生と交流して話をする方がはるかに効果がある。そういうことをどこかでやる必要があると思う。

また、全国の公立大学を見ると、非常に特色のあることをやっている。いろいろ参考にされたらいいと思う。

（委員長）

それでは、これまでの意見を踏まえ、全部Ａで仮置きとなっている評価について議論していきたい。

（委員）

過去の６年間を見て、少なくとも第１の教育、第２の研究、第３の地域、第５の財務に関してはすばらしく、Ｓであるべきだと思う。

（委員）

第５の財務内容の部分はＳで評価をお願いしたい。

（委員）

研究について、右肩上がりによくなってきているということが分かるので、やはり研究はＳだろうと思う。

（委員）

教育、研究、地域、財務に関してはすばらしく、Ｓであるべきだと思う。

（委員長）

私の意見を言うと、教育、研究、財務は年度評価が２年連続Ｓなので中期目標期間評価もＳでいいかと思う。４番目の業務運営の改善及び効率化、６番目の自己点検評価及び情報の提供、７番目のその他業務運営はずっとＡであり、Ａでよいと思う。

地域貢献は昨年度がＡであったことから、中期目標期間評価はＳに上げるまでには至っていないと考えるが、いかがか。

（委員）

地域貢献がＳでもよいのではないかと思った理由は、大学の研究シーズと企業のニーズのマッチングの効果が出ているように感じ、地域に非常に貢献されたのではないかと思ったためである。私見としてＳでないかとは

思ったが、皆さんの意見がＡということであれば従う。

（委員）

悩ましいところだが、まだＳではないのかなと判断する。もしＳＡというのがあれば一番いいのだが。

（委員）

令和２年度の評価でＡとしたことを踏まえると、そのままＡが妥当なのかなと考える。

（委員）

地域課題解決に向けた企業など随分増えており、実施の教員の割合も目標値にあり、公開講座受講者数も増えているのでＳとしたが、次期での期待を含めＡでいいかもしれない。

（委員長）

皆さんの意見を踏まえ、Ａということにしたい。

確認すると、教育はＳ、研究はＳ、地域貢献はＡ、業務運営はＡ、財務はＳ、自己点検及び情報提供がＡ、その他業務運営がＡということでこの場では決めたいと思う。文章としての評価は事務局の方で用意をお願いする。

それでは、本日の議事はこれで終了する。